

光の証人と闇の使い

ヨハネによる福音書1:6～8、19～28

今日の福音書は、洗礼者ヨハネについて述べています。

同時に彼は、当時のユダヤ社会を驚かせた人物です。彼は、王であったヘロデ、大祭司カイアファ、ラビ大ヒレルに代表されたユダヤ社会に大きな変化を起こした人です。誰でも洗礼者ヨハネを尊敬し、さらに、サドカイ派の人々、ファリサイ派の人々も洗礼者ヨハネのところに洗礼を受けに荒れ野まで来ました。洗礼者ヨハネに従っている人々も多かったのです。しかし、洗礼者ヨハネは、このすべてのことをイエスさまに譲りました。そして自分は、福音のための声になりたかったのです。

今日の福音書6～8節の言葉を通してヨハネによる福音書の著者は、洗礼者ヨハネがどんな人だったかを語ってくれます。神さまから遣わされた人、光ではなく、光について証しする人。この人が洗礼者ヨハネだったと語ります。これだけでなく、ヨハネによる福音書は、他の福音書に記録されていない、イエスさまについて証しする洗礼者ヨハネの他の姿も、記録しています。ヨハネによる福音書1章のたいていの部分は、洗礼者ヨハネについて記録し、3章、5章、10章にも、洗礼者ヨハネについて記録しています。そして、洗礼者ヨハネについてのこのような記録は、すべて、洗礼者ヨハネはイエスさまについて証しをした人だということです。このようなことから考えてみると、当時、洗礼者ヨハネの考えとは違って、洗礼者ヨハネに従っていた人々は多かったと思います。洗礼者ヨハネは、人々が自分をイエスさまの道を準備する者、証しをする者として思ってくれるように願ったと思います。自分を通してイエスさまがこの世に知られ、福音が伝えられることを願ったのです。しかし、これとは違って、多くの人々は洗礼者ヨハネに従い、さらに彼をメシアだと思っていた人々もいたと思います。そのような人々に、ヨハネによる福音書の著者は、洗礼者ヨハネの証言を聞かせます。そして、今日の福音書19節からの言葉を通して、洗礼者ヨハネの考え、洗礼者ヨハネが守ろうとしたのは何なのかを教えてください。

今日の福音書19節では、祭司長とレビ人たちが登場します。

ヨハネによる福音書は、彼らをエルサレムのユダヤ人たちから遣わされた人だと書いてあります。つまり彼らは、権力者のお使いとして洗礼者ヨハネのところに来ました。そして、彼らは洗礼者ヨハネに「あなたはどなたですか」と尋ねます。この質問には、多くの意味が含まれていると思います。当時の人々が洗礼者ヨハネをどんな人物だと思っていたか、エルサレムの権力者たちがどんなプレッシャーを受けていたか、初代教会の中で、洗礼者ヨハネがどんな人として仰がれていたかなどを、この質問を通して知ることができます。この質問に洗礼者ヨハネは、「わたしはメシアではない（20節）」と答えます。ところが、この答えにヨハネによる福音書の著者は、修飾語を付けています。「公言して隠せず… 言い表した」という長い修飾語です。ヨハネによる福音書は、この長い修飾の文章を通して、洗礼者ヨハネはメシアではないということにピリオドを打ちます。

時には、自分の意志や意図とは関係なく、人々にほめられることがあります。

ほめられるというのは良いことですが、そのほめ言葉によって、自分の意志や意図、または、自分の考え方が変わることもあると思います。最初は良い意味と意志を持って始めましたが、変質されていることがかなり多いのです。政治家、法律家、社会活動家、そして宗教人までも。最後がよくない人が少なくありません。初心を忘れないこと、どんな状況でも揺れないのは、本当に大事なことです。洗礼者ヨハネはこれを願い、ヨハネによる福音書は彼の考えを支持したと思います。群衆だけでなく、宗教指導者たちも、洗礼者ヨハネが特別な人、メシアかもしれない人だと思いました。しかし、洗礼者ヨハネは、自分はそうではないと言います。

エルサレムのユダヤ人に遣わされた人々は、洗礼者ヨハネに続けて尋ねます。

「あなたはエリヤですか」、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねます。彼らが尋ねたエリヤとあの預言者というものは、旧約聖書と関連があります。まずエリヤについての言葉です。マラキ書3章23節です。「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に預言者エリヤをあなたたちに遣わす。」列王記下2章を見ると、エリヤは死なず天に上って行ったと書かれています。そして死に臨まないエリヤは、この世に戻って

神様の新しい日を知らせるのだとマラキ書は述べています。そのため、特異な姿と行動をしながら多くの人々を導いている洗礼者ヨハネにエリヤですかと尋ねたのです。しかし、ヨハネは「違う」と答えました。

そして、この次の質問である「あなたは、あの預言者ですか」というのは、申命記18章15節と関係があります。「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聴き従わねばならない。」ユダヤ人にとって、エリヤほど偉大な人がもう一人いました。その人はモーセです。申命記18章の言葉によると、神様はモーセのようなリーダーを立ててご自分の民を導くと言われました。だから、人々はこの言葉を思い出して洗礼者ヨハネに「あなたはあの預言者なのですか」と尋ねたのです。

つまり、宗教指導者たちの使いたちは、洗礼者ヨハネにメシアを含め、イスラエルの歴史の中で最も偉大な人々の顕現ではないかと尋ねたのです。このような質問をするほど、洗礼者ヨハネの評判はものすごかったのです。この質問に洗礼者ヨハネは、そうではないと答えます。すると、お使いたちは、自分たちがヨハネのところに来た目的を言います。22節の言葉です。

「そこで、彼らは言った。『それではいったい、だれなのです。わたしたちを遣わした人々に返事をしなければなりません。あなたは自分を何だと言うのですか。』」

この質問に洗礼者ヨハネは、自分を「声だ」と言います。

おそらくこの答えは、お使いたちを慌てさせたと思います。

彼らは洗礼者ヨハネに何かもっともらしい答えを聞きたかったでしょう。自分たちを遣わした人々に報告する価値があること。自分たちも納得できる答えを聞かせて欲しかったのです。もし洗礼者ヨハネが、自分はエリヤの顕現だとか、あの預言者だと言ったなら、彼らは感心して帰ったのだと思います。洗礼者ヨハネは、そう思われるほどに十分な人であり、当時の人々であれば、誰でも納得できるほどの答えだったからです。しかし、洗礼者ヨハネは、自分は主の道をまっすぐにせよと荒れ野で叫ぶ声に過ぎないと言います。私はこの答えがお使いたちを慌てさせたと思います。

多くの人々は、偉大な人であれば、名門の人、良い大学出身、インテリ、高い地位の人などを思い浮かびます。そうでなければ、自分の分野で大きな業績を残した人を偉大な人だと言います。そして、自分もそのような人になるように願っています。洗礼者ヨハネのところに来たお使いたちも、彼らを遣わした人々も、このような考え方を持っていたでしょう。だから、洗礼者ヨハネに、「あなたはメシアか、エリヤか、モーセか」と聞いてみたと思います。しかし、このような考え方は、神の国と合いません。もし洗礼者ヨハネが自分を偉大な人だと思っていたなら、光の証人とは言えないでしょう。最初は、光の証人として始まったかもしれませんが、その終わりは闇の使いになって終わっていたでしょう。洗礼者ヨハネは、自分を声だと答えました。自分は何もない人、ただメシアについて証言する人だということです。

するとお使いたちは、そのような人が、なぜ、洗礼を受けるのかと尋ねます。

声に過ぎない者が洗礼を受ける資格があるのかということでしょう。闇の使いたちは、光の証人を理解することができなかったのですよね。この質問に洗礼者ヨハネは、自分は水で洗礼を受けると答えます。この答えは、お使いたちの質問とは関係のない答えであるように見えます。しかし、洗礼の役割について考えてみると、洗礼を受けるということは、神の子になる準備をさせるという意味です。だから、洗礼者ヨハネは、すべての人をイエスさまに導くために荒れ野で叫ぶ声として洗礼を受けると答えたのだと思います。洗礼者ヨハネらしい答えだったと思います。

多くの人々が光の証人として始め、闇の使いとして人生の幕を下りていると思います。

それほど自分に与えられた使命を謙遜にしていくのは、容易なことではありません。だから、今日の福音書が私たちに与えてくれる教えを、私たちは忘れてはいけません。洗礼者ヨハネが歩いて行った道が信仰の道であり、私たちが歩いて行かなければならない道だと思います。待降節第3主日、主の到来をお待ちになって、すべての栄光が主にのみあることを願っておられる皆さんに、神の祝福がありますように、主の御名によって祈ります。アーメン